

- ①一人語り 〈火車猫(ねご)おとら〉(『謎のなんじゃもんじゃ』げんごろう) …… きむら啓子
 ・昭和51年当時88歳の婆さまからの聞き書き。本家の後妻に入ったが、義理の長姉は全盲で近県を巡回する替女(ごぜ)だった。こういった旅芸人は新潟などに限定されると思っている方が多いが、実は関東各地にも居住していたのである。話の中で「らいさま」と言うのは雷の事。火車はいろいろな語りに出てくる。因みに「幽霊殺人事件」には遊廓(ゆうかく)の遣手婆(やりてばあ)が登場するが、別名を「火車婆」と呼ぶ。
- ②二人語り 〈送りチョウチン〉(『おいてけ堀』) …… 梅沢智美・高見菜穂美
 ・本所七不思議の一つ。今日ご覧願ったのは93年げんごろう刊行の『おいてけ堀』に掲載した話。良く似た話に「送り拍子木(ひょうしき)」と言うのがある。09年春新刊の「新版」『置いてけ堀』には、岡田国輝の描いた絵と共に二つのお話をのせた。☆作曲・演奏・桜ノン
- ③一人語り 〈木挽(こびき)の爺さまと河童〉(『柏・我孫子のむかし話』単独舎) …… きむら啓子
 ・戸張川(とばり)は土地の通称。本当は天津川のこと。開発の波が押寄せる以前の千葉県柏市は山林もあちこちにあり、コビキの作業を良く見かけた。アッポは糞(うんち)の地域語。アッポ木とは?黄濁した……ご想像を。
 下総(シモーサと発音)地方には、貉(むじな)に化かされた話は狐や狸より多いのデス。木材をでっかい鋸(のこぎり)でデレコン・デレコンと挽くのを、いたずら貉が邪魔しにやって来る…でも今日は。
- ④一人語り 〈予言する人形〉(『笑うどくろ』実業之日本社) …… 三嶋泰子
 ・貧乏旗本の養子から異例の出世をした町奉行・根岸肥前守(ねぎしひぜんのかみ)は、テレビドラマにもしばしば登場する人気奉行の一人だが、「耳袋」という、見聞した世間話をまとめた著述がある。日吉丸の伝説に必ず登場する矢作橋(やぎばし)が宝暦の初め(1750年代)大規模な改修工事を行った折の怪異譚。☆作曲・演奏・桜ノン
- ⑤一人語り 〈たましいの散歩〉(『笑うどくろ』実業之日本社) …… きむら啓子
 ・紀伊国坂(きのくにさか)の染物屋の若主人が眠っている間に、体からさまよい出た遊魂が、武士に一刀両断されそうになる。狂歌師の平扶東作(づつ・とうさく)が書いた『怪談老の杖』から。紀伊国坂は紀州家の中屋敷のある昼なお暗く寂しい場所だった。☆作曲・演奏・藤原大吾/演奏・桜ノン
- ⑥三人語り 〈猫の仇討ち〉(『猫の仇討ち・猫の恩返し』げんごろう) …… 近藤真紀子・井上秀之・齊藤嵩也
 ・両国の回向院(えこういん)境内にはいくつもの猫塚があるが、鼠小僧次郎吉墓の左にケースに入って置かれているのが一番古い。立札に記された話など三つの民話が伝わる。この話は落語の名人・三遊亭円生のCDにも取められているが、バクチ打ち定(さだ)さんに命を救われた捨て猫が、身を捨てて仇討ちをする民話デス。

〈休憩10分〉

- ⑦一人語り 〈無間の鐘^{むけん}〉(『狐の嫁入り』げんごろう/『謎のなんじゃもんじゃ』/『松戸のむかし話』単独舎) …… きむら啓子
 ・遠州(静岡県)小夜(さよ)の中山の無間寺の鐘を撞くと長者になるが、あの世では無間地獄に墮ちるといふ伝説がある。文楽・歌舞伎でも上演される源平合戦を舞台にした『ひらかな盛衰記』四段には、無間の鐘を撞くくだりが登場する。これは下総(しもうさ)地方に伝わる民話です。
- ⑧一人語り 〈小判の鐘〉(同上) …… きむら啓子
 ・無間の鐘を撞いてなった長者は、来世の地獄から逃れようとして、善根(ぜんこん)を積もうとする。
- ⑨一人語り 〈猫の恩返し〉(『猫の仇討ち・猫の恩返し』げんごろう) …… 柴田恵子
 ・猫が大好きな独り者の魚の行商(ぎょうしょう)が、出入りしている両替(りょうがえ)商が飼っている猫に、小魚をやって可愛がっていた。行商が病で倒れた時、その猫が店の小判をくわえて「恩返し」をするが、化け猫と疑われ殺されてしまった。それを知った行商は?
- ⑩一人語り 〈あんまさんの仇討ち〉(『取手のむかし話』単独舎) …… きむら啓子
 ・利根川を回漕(かいそう)する高瀬船(たかせぶね)を持ち、船宿もやっていた土地の名家の家付娘に生まれた婆さまの語る頓智話。この民話は「狐の鳴き色」のタイトルで全国に伝承があります。
- ⑪一人語り 〈蛇女房〉(『狐の嫁入り』げんごろう) …… 酒井美代子
 ・作者は神奈川県委嘱で「神奈川のむかし話50選」の選定委員を勤めた。その折に選んだ民話を次々に劇化。これは、各地で良く上演されているものの一つです。=作曲・横山太郎。
- ⑫一人語り 〈鬼神のお松〉(『狐の嫁入り』げんごろう/『謎のなんじゃもんじゃ』/『松戸のむかし話』単独舎) …… きむら啓子
 ・旅廻りの館屋一座や替女(ごぜ)宿もした家に育った婆様からの聞き書き。お松は実在ではなく文化文政期のチョンガレ節(浪花節)の産み出した物語。荒木又右衛門殺害も虚構。それに、お松の物語に出て来る川は信濃川ではなく衣川(ころもがわ)だった。これには別に、五人の婆さまたちが、二十一夜待ちのお籠(こ)もりで、念仏となえながら大念珠を繰り物語る、群説劇脚本もあります。
- ⑬群読劇 〈おいち狐とでんぜむ狐〉(『猿蟹忠臣蔵』げんごろう) …… 柴田恵子・近藤真紀子・梅沢智美
 高見菜穂美・奥本あかね・依田学・井上秀之・齊藤嵩也・きむら啓子
 ・狐の嫁入りには、日照り雨の空に架かる虹の上を渡るのや、闇夜に小田原提灯を下げ、馬にゆられて行くのが知られているが、これは珍しい牡丹雪降る闇夜の嫁入りです。☆作曲・演奏・藤原大吾/桜ノン

◇⑧を除き、全作品の原作・脚色・岡崎柗男
◇全作品の総合演出・平尾登紀子
◇全作品の演出・振付・平尾麻衣子

1月18日(日) pm2:00

- ①二人語り『キツネの嫁入り』(『おいてけ堀』げんごろう)……………齊藤嵩也・奥本あかね
・農耕社会日本には全国的に狐の嫁入り話がある。でも江戸市中の大名上(かみ)屋敷を舞台にしたものは滅多(めった)ト無い。近江膳所(おうみせせ)六万石の本多家に起った狐夢物語。文政6年(一八二三)跋(ばつ)『江戸塵拾(ちりひろい)』に元の話はあります。☆作曲・演奏・桜ノソ
- ②一人語り『里見の姫の夜泣き石』(『謎のなんじゃもんじゃ』げんごろう)……………土屋くに子
・永禄7(1564)年の第二次国府台の合戦で、房総の雄・里見軍が出陣したのは、小田原北条と甲斐の武田信玄の連合軍に対抗する上杉謙信の要請によるものだったが、里見弘次は破れた。その姫は父の亡骸を探して戦場をさまよい、衰弱死した。その怨念は石となり夜ごと泣き声をあげた…今も伝説の石はある。
- ③一人語り『成田のお札』(『謎のなんじゃもんじゃ』/『下総の唄歌』単独舎)……………きむら啓子・奥本あかね
・成田山功德譚の一つ。元の話をしてくれた婆さまは、旅回りのヨカヨカ館屋から聞いた話だといった。「ヘンゼルとグレーテル」「白雪姫」など、こういった話はグリムにもアンデルセンにも沢山あるが、継父母の家庭が増えるにつれて、こういった話は次第に語られなくなってしまった。
- ④一人語り『藤 姫』(『謎のなんじゃもんじゃ』げんごろう)……………三嶋泰子
・安永4年(一七七五)刊『物類称呼(ぶつるいしょうこ)』にも記されているが、虚空蔵菩薩(こくうぞうぼさつ)を深く信仰する人の中には鰻(うなぎ)絶ちをして一生口にしない人も居るといふ。また寅(とら)生(なま)まれは鰻(うなぎ)を食べるのを禁じている土地もある。元の話は春日部市と田岡宿町で呉服商を営んでいた方からの聞き書きによる。☆作曲・演奏・藤原大吾
- ⑤紙芝居『おいてけ堀』(『おいてけ堀』)……………柴田恵子・依田学
・七不思議の第一に上げられるのが本所。その中でも誰の話にも最初に登場するのが、これ。でも、ここがその場所だという説は、何か所もある。詳しくは『江戸東京伝説散歩』(1880=青蛙房)をご覧ください。本の中でほかの七不思議も一緒にご案内しております。
- ⑥一人語り『イタチの九助』(『笑うどくろ』実業之日本社)……………箇木明紀
・蝦夷国(えぞのくに)松前函館(まつまえはこだて)地方のわびしい小さな漁村に、いつの頃からか庵(いおり)を結んだ旅の僧侶が居た。若い日々はイタチの九助と二つ名を持つ小悪党だった。…尾張藩士だった三好山(みやしそうざん)が嘉永3年(一八五〇)に著した『想山著聞奇集(ちよもんきしゅう)』に元の話はある。
☆作曲・演奏・藤原大吾/演奏・桜ノソ
- ⑦一人語り『西の家六丸芸人 噺』(『下総の唄歌』単独舎)……………きむら啓子
・太平洋戦争前までは日銭の入る漁師天国浦安には寄席や芝居小屋もあり、地場の芸人衆も大勢居た。そんな昔噺をひとくさり。どんどん節籠(かご)で行くのはお軽(おかる)じゃないか……の愉快な替え歌もご披露。
- ⑧一人語り『虹の空』(藤沢周平原作・岡崎柗男脚色)……………酒井美代子
・これは民話ではなく、藤沢周平原作の江戸は本所が舞台の短編ひとり語り。ごく内輪(うちわ)の会で時代小説の珠玉の短編を試演しており、そのなかから一編を選んでフラメンコギターの第一人者の生演奏でお聞きねがいます。
☆作曲・演奏・藤原大吾

《休憩10分》

- ⑨一人語り『いやじゃあ～りませんか戦争は』(前同)……………柴田恵子
・作家・高見順も『敗戦日記』の中で、「爆弾除けとして、東京ではらっきょう」を食べたり、「金魚を拝む」ことが流行していると記しています。が、戦中のデマ、流言蜚語(りゅうげんひご)には奇想天外な物もあった。中でも「くだん」はゴジラ顔負けの怪物だったのデス。
- ⑩二人語り『どんどん河童』(『江戸城七不思議』)……………きむら啓子×井上秀之
・江戸城を取り巻くお堀には妖しのものたちが棲んでいた。豪雨の昼さがり、寺子屋師匠もしている剣術自慢の浪人が、遭遇したのは「水虎(すいこ)」と呼ばれる妖怪だった。これ実は河童の別称。
- ⑪一人語り『逢魔(おうま)が時の妖怪』(『蜘蛛の呪い』実業之日本社)……………近藤真紀子
・江戸は麴町(こむぎ)の裏店で、ささやかな小間物を商う、気楽な独り者の甚助が、すれ違う人の表情も良く分からない頃合いに店を訪れた、美しい娘の姿をした魔物に魅入られた……。☆作曲・演奏・藤原大吾/演奏・桜ノソ
- ⑫一人語り『山姥(やまんば)の糸車』(『江戸城七不思議』)……………きむら啓子
・「神奈川のむかし話50選」に選定されたもの…つまり相模国の元の話と、語り手の暮らす下総(しもうさ=発音は「シモーサ」)地方の方言に移し変えて語ります。鉄砲(てつぱ)ブチ(撃ち)の名人ウバモの長七の物語。☆作曲・演奏・藤原大吾
- ⑬群読劇『おいち狐とでんぜむ狐』(前同)

◎つごうにより、演目や出演者が変更になる場合もございます。